



7年続く
金曜夕方久米川駅前 脱原発アピール行動
通称「キンクメ」

そのはじまりと思い

会員 / 東村山市 吉森 弘子

2021年1月1日(金)に、「金曜夕方久米川駅前脱原発アピール行動(通称キンクメ)」は第370回を迎えました。今回、ごみっと・SUNでの紹介にあたり、7年間の振り返りの機会をいただけたことに、まずは感謝申し上げます。

脱原発のアピール活動はカテゴリーとしてはごみ問題とは別です。しかし、同じ環境問題とも言えるし、後始末ができない大人たちの問題という点では相通じるものがあります。

昨年来、北海道寿都町や神恵内村で起きている「核のごみ」最終処分場の選定を巡る状況も、地域の分断をとまなう重苦しいものです。見通しもなく「とりあえず保管」しながら原発を推進してきたこれまでのやり方は、将来世代への責任ある行動とはとても言えません。

キンクメのはじまりは、2013年11月でした。この年の夏、地域の仲間が集まって、原発事故から2年半の福島現状を視察したのがきっかけでした。

原発事故から2年半の福島

2013年8月23日(金)、私たちは東京電力福島第一原子力発電所を臨む丘の上にいました。周りの草むらは緑濃く、どこにでもある夏の風景です。しかし、もぬけの殻になった福祉施設「サンライトおおくま」のガラス戸は壊れたまま、しーんとしています。2011年3月から2年半の時間は止まったままのようで、降り積もる埃に月日が感じられます。



その埃に、含まれるものでもあるのでしょうか、それぞれの持つ線量計が警戒音をピーピーと発して、針が振り切れてしまいました。

誰もいない町を抜け、子どもたちが通っていた海辺の請戸小学校に寄りました。教室の黒板は、「ガンバレ福島」「ありがとう」など支援に訪れた人たちの激励や返す感謝の寄せ書きであふれていました。しかし、教室の隅にはランドセルが転がり、教卓には日直当番のノートが置かれたままです。卒業式の飾りつけが残る体育館では、ねぐらにして



いるのか、人の気配に飛び立つ鳥の羽音に驚かされました。ここでも、言葉にできない思い。

「ここに住んでいたのよ」と案内された浪江の民家は、獣の足跡で踏み荒らされ、ネズミの糞にまみれていました。「家にあったものは、みんな放射性廃棄物になってしまったから、持ち出すこともできなくて、片付けられないのよ」と申し訳なさそうに「土足で入ってね」と告げられて、しばらくして出た玄関先に、白い花が揺れる。「あら、秋明菊。咲いたのね。母の庭からもらってきたものなの」と、明るい声が響く。家の近くを流れる川筋のクルミの木には、まだ青い実がついていて、そんな当たり前の季節の移ろいが、失われた暮らしを際立たせる。

地元でやろう！「脱原発・金曜行動」

福島視察から帰ってきた私たちは、しばらく互いに会おうともせず、ふさぎ込んでいました。何をどうしていいのかわからないまま、誰にもわからなかったのです。ただ、ショックで、9月になって、行けなかった人々たちから「どうだった？」と聞かれて、やっと小さな報告会の準備を始めました。写真を整理し、パワーポイントの準備をし、チラシを作り、参加を呼びかける。一連の作業が、気を紛らせてくれました。そして、報告会を終えて、「そうだ、地元でもできる何か継続的な取り組みをやろう！」と提案があった。免許符のつもりではないけれど、裏を返せばまるで罪滅ぼしか支え合いのように始まったのが、キンクメでした。その分、楽しさや明るさを出すことも心掛けていました。

国会前から始まった全国の金曜行動は、当時、100以上あったと聞いています。いろいろな事情で国会前まで行けなくても、同じ思いの人たちがいることはわかっていたし、気軽に参加できる地域から連帯の輪を広げていくことで、何かの力になれるんじゃないかと考えました。選挙だって結局は地元なのだしと、およそ似合わぬ皮算用まで理由のひとつに数えていたのを覚えています。

キンクメは出会いの場

2013年11月8日(金)夕方6時~7時、おずおずと第1回のスタンディング。すでにあつたメンバー手持ちの反原発西武線沿線連合の旗やフライヤーを使うことにしました。それ以来、ほとんどの金曜日に続いてきました。

途中で、愛称を「希望のエリア東村山」としたところ、時を同じくして国会前でも「希望のエリア」が立ち上がっており、規模は違っても「姉妹のようね！」と国会前のあすかさん、二郎さんたちとの連帯感が深まりました。

時間になると、自転車に旗を張り、ただ立つのもOK！スピーチや歌、音楽が入ることもあります。BGMによく使ったのは、本田美奈子さんの「アメイジング・グレイス」。「何も知らずに生きてきた。私はもう迷わない」と心の中で一緒につぶやきながら。クリスマス前後にはジョン・レノンの「戦争は終わった」を流すと、立ち止まって聞いていく人がいました。

スタンディングの最中に、「どこかの政治団体？」「市民団

体ですか？」と聞かれることがよくありましたが、当初からキンクメは個人の集まりと位置付けていました。決めてあるのは、曜日と時間と場所だけ。メンバーも入れ替わり立ち替わりだし、飛び入り参加も、楽器やフライヤーの持ち込みも大歓迎！原発なくなるまで皆さんと一緒に！と呼びかけています。

季節ごとのキンクメ、そしてコロナ禍での活動

寒い季節のキンクメは日も落ちて、寒さも厳しいので、季節のイベントで楽しんでいます。写真は「ハロウィンキンクメ」と「Xmas キンクメ」。



年に一度、夏の七夕キンクメは、ちょっとしたイベントです。普段は通り過ぎる人にも、気軽に参加してもらえるように考えました。風に揺れる短冊には、みんなの願いが書き込まれています。



2020年春、新型コロナウイルスの感染流行により、私たちのスタンディングもソーシャルディスタンス形式で実施しました。

さらに4月、初めてのコロナ緊急事態宣言が発出されると、1時間とはいえ街頭に立つのはためらわれました。相談した結果、家からでも参加できるようにと、5月の解除まではTwitterやzoomを使ったオンラインキンクメに切り替えて回数を重ねました。

2020年の暮れには、数年来参加されている劇団『民藝』の別府康子さんが出演された映画『風の電話』のDVD上映会を、仲間が内輪で開催しました。映画は、小学生の時に東日本大震災による津波で家族を失い、故郷を離れて広島で暮らす高校生ハルが、大槌町の自宅跡に向かう旅を描くロードムービーでした。

福島県では、今も原発に近い地域で暮らす人たちが、家があってもやはり家族を失い戻れない人も出会います。10年近く経っても、原発震災の傷跡が癒えることはない。人々の心からも、大地からも。それでも、「おばあちゃんになるまで生きていくよ」というラストシーンに、胸を打たれて、ほっとしました。

自分の街で脱原発の声を上げてきて…

2016年秋、キンクメに集う数人が中心になり、「東村山エナジー」という市民団体が立ち上がりました。「市民の力でエネルギーの地産地消を進めよう」を目的に、地域の他の団体、企業、行政とともに活動を模索しています。

キンクメは、福島視察の風景を思い出すといたたまれなくて「こんなことしかできないけど」と始まった取り組みでした。自己満足と言われることもあります。しかし、こうして身近な地域で新しい動きを生み出す場にもなってきました。

コロナで明けた2021年は、東日本大震災とそれに伴う原発事故から10年の節目の年です。再度の緊急事態宣言下、

寒波と大雪による電力逼迫報道。日本社会は、またもや原発にしがみつきの、あの人災さえも風化していくのかと愕然とします。

でも、思い出します。3.11後、「チェルノブイリの歌姫」と呼ばれるナターシャ・グジーさんの歌を聞き、「過ちを繰り返さないで」と訴える声が痛切だったこと。

浪江町の秋明菊の家の方から届けられた「福島民報」の特集「きぼうのとり」というお話に、涙したこと。「きぼうのとり」が2021年3月11日には絵本として発行されると知り、震災や事故からの学びをこれからに生かしていかななくてはならないと、やっぱり多くの人が考えていると教えられたこと。最近よく読まれている本に「3.5%の本気で社会は変わる」ってあったこと。

過ぎていく日常には、人の心を再生させる不思議な力があるようです。重なっていく数え切れない出会いやエピソードは、互いが人生の旅で見つけた宝物かもしれないと思いながら、時々キンクメで演奏してくれるストリートピアニスト及川知宣さんのオリジナルCDを聞いています。

そうそう、アイルランド生まれの英語教師Eさんに教わった原発関係のニュース英語も、次に会う時のために復習しておかなくては。

<https://kinnkume.amebaownd.com/>



みんなで考える持続可能なまちづくり ～東村山をエネルギー持続地帯に～

「エネルギーの地産地消」「シェアリングエコノミー」…
視点を変えるとコミュニティビジネスのチャンスでもあります。

まちの資源を最大限に活かし、安心できる
ゆたかな暮らしをつくるためのアイデアを伺います。

日時：2021年1月29日（金）20:00～22:00

講師：倉阪秀史先生（千葉大学教授・環境政策論）

会場：オンライン開催

参加費：無料（応援チケット歓迎）

主催：東村山エナジー

*申込詳細は「東村山エナジー」で検索し、サイトを参照

